

# 基礎からの力学系 (第7章)

## 参考文献

- 小室, 基礎からの力学系, サイエンス社, 2002

## Table of contents

- 写像の周期点, およびベクトル場の周期軌道の分岐

## はじめに

この章では、写像の周期点の分岐について述べる．

$$\boldsymbol{x} \mapsto f(\boldsymbol{x}, \mu), \quad \boldsymbol{x} \in \mathbb{R}^n, \mu \in \mathbb{R}^p \quad (7.1)$$

$\mu = \mu_0$  のとき,  $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{x}_0$  が不動点であるとする．

$$f(\boldsymbol{x}_0, \mu_0) = \boldsymbol{x}_0 \quad (7.2)$$

### Def 7.1 (双曲型, 安定, 不安定)

$\boldsymbol{x}_0$ において線形化して得られる線形写像

$$\boldsymbol{u} \mapsto A\boldsymbol{u}, \boldsymbol{u} \in \mathbb{R}^n, \quad (7.3)$$

$$A = D_{\boldsymbol{x}} f(\boldsymbol{x}_0, \mu_0) = \left( \frac{\partial f_i}{\partial x_j}(\boldsymbol{x}_0, \mu_0) \right)_{1 \leq i, j \leq n} \quad (7.4)$$

において,  $A$ のどの固有値も単位円  $S = \{\lambda \in \mathbb{C} \mid |\lambda| = 1\}$  上にないとき, 不動点  $\boldsymbol{x}_0$  は双曲型であるという.

$A$ のすべての固有値が単位円の内側  $\{\lambda \in \mathbb{C} \mid |\lambda| < 1\}$  にあるとき, 不動点  $\boldsymbol{x}_0$  は安定であるという.

$A$ の少なくとも1つの固有値が単位円の外側  $\{\lambda \in \mathbb{C} \mid |\lambda| > 1\}$  にあるとき, 不動点  $\boldsymbol{x}_0$  は不安定であるという.

## Def 7.2

パラメータ $\mu$ を固定して、写像 $f(\cdot, \mu) : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ の $p$ 回の合成写像を $f^p$ で表す.

$$\boldsymbol{x} \mapsto f^p(\boldsymbol{x}, \mu) \quad (7.5)$$

$$f^p(\cdot, \mu) = f(\cdot, \mu) \circ \cdots \circ f(\cdot, \mu) \quad (7.6)$$

点 $\boldsymbol{p}$ が $f^p$ の不動点であり、 $1 \leq i < p$ なる任意の $i$ に対しては、 $f^i$ の不動点ではないときは、 $\boldsymbol{p}$ は $f$ の $p$ 周期点であるという.

$$f^p(\boldsymbol{p}, \mu) = \boldsymbol{p}, \quad f^i(\boldsymbol{p}, \mu) \neq \boldsymbol{p} \quad (1 \leq i < p) \quad (7.7)$$

$f$ の $p$ 周期点 $\boldsymbol{p}$ がそれぞれ双曲型, 安定, 不安定であるとは、 $f^p$ の不動点として双曲型, 安定, 不安定であることである.

写像  $f$  の周期点の分岐は合成写像  $f^p$  の不動点の分岐に帰着する.

### Th 7.1

$\mu = \mu_0$  において不動点  $x_0$  が双曲的であればパラメータ  $\mu$  を  $\mu_0$  の近傍で変化させるとき, 不動点は持続して, 安定性の型は変化しない.

⇨ 写像の不動点の分岐を考えるには,  $\mu = 0$  のとき, 原点に非双曲型不動点を持つ場合を考えればよい.

# 1次元写像のサドル・ノード分岐

## 1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) = x + \mu - x^2, \quad x \in \mathbb{R}, \mu \in \mathbb{R} \quad (7.8)$$

を考える.

1.  $\mu < 0$  のとき: 不動点を持たない.
2.  $\mu = 0$  のとき:  $x = 0$  に固有値1をもつ不動点を持つ.
3.  $\mu > 0$  のとき: 2つの不動点  $P^+ = (\sqrt{\mu})$  と  $P^- = (-\sqrt{\mu})$  を持つ.
  - $P^\pm$  の固有値は  $f_x(\pm\sqrt{\mu}, \mu) = 1 \mp 2\sqrt{\mu}$  で与えられる.
  - $0 < \mu \ll 1$  ならば,  $P^+$  は安定,  $P^-$  は不安定.

パラメータの変化に伴って, 安定不動点と不安定不動点が接近し, 合体し, そして消滅する (サドル・ノード分岐).

一般に1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) \quad (7.9)$$

が  $f(0, 0) = 0, f_x(0, 0) = 1$  を満たすとき,

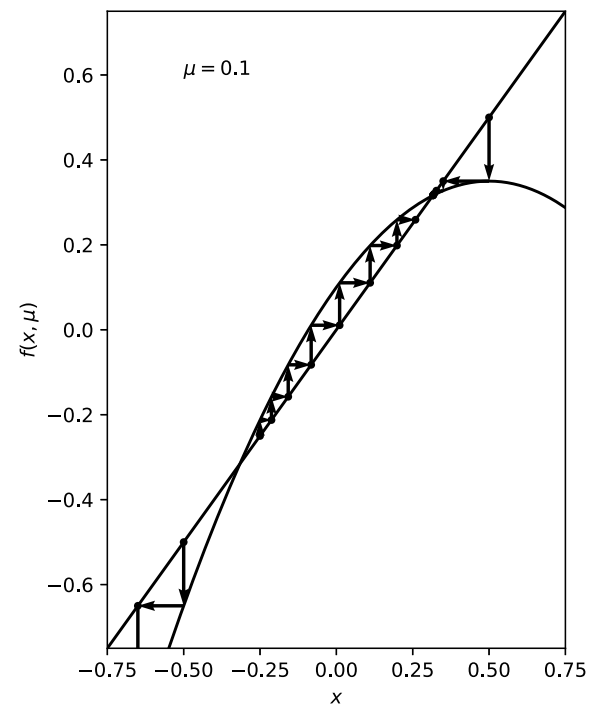
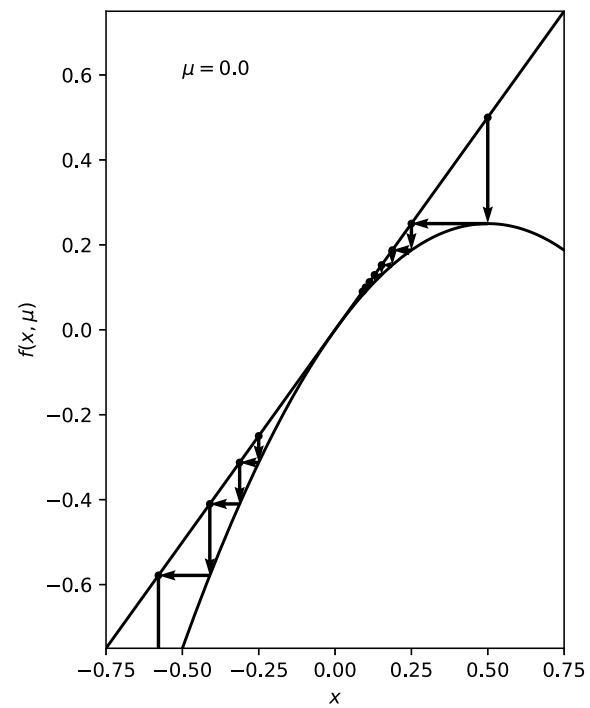
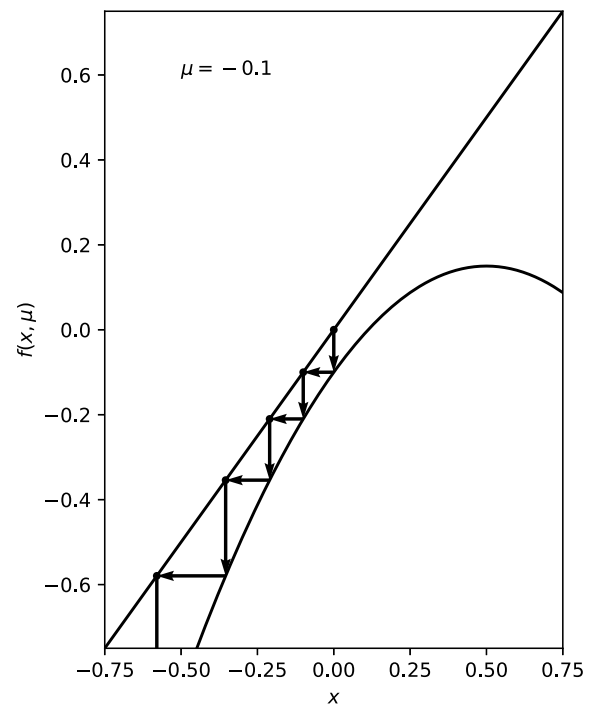
$$f_\mu(0, 0) = 0, \quad f_{xx}(0, 0) \neq 0 \quad (7.10)$$

ならば,  $\mu = 0$  のとき  $x = 0$  においてサドル・ノード分岐が生じる.

サドル・ノード分岐を生じる1次元写像の標準形は,

$$x \mapsto x + \mu \mp x^2 \quad (7.11)$$

で与えられる.





## 1次元写像のトランスクリティカル分岐

写像  $f(x, \mu)$  が  $x = 0$  に常に不動点を持つという拘束条件

$$f(0, \mu) = 0 \quad (7.12)$$

の下で一般的に生じる分岐.

1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) = x + \mu x - x^2 \quad (7.13)$$

を考える.

1.  $\mu < 0$ かつ $|\mu| \ll 1$ のとき: 不動点 $O = (0)$ は固有値 $1 + \mu < 1$ を持ち安定. 不動点 $P = (\mu)$ は固有値 $1 - \mu > 1$ を持ち不安定.
2.  $\mu = 0$ のとき: 不動点は $O = (0)$ のみで, 固有値は1.
3.  $\mu > 0$ かつ $|\mu| \ll 1$ のとき: 不動点 $O = (0)$ は固有値 $1 + \mu > 1$ を持ち不安定, 不動点 $P = (\mu)$ は固有値 $1 - \mu < 1$ を持ち安定.

パラメータの変化に伴い, 不動点 $O$ に他の不動点 $P$ がぶつかり, 通過し, 不動点 $O$ は安定から不安定に, 不動点 $P$ は不安定から安定になる (安定性の交代).

⇨ トランスクリティカル分岐

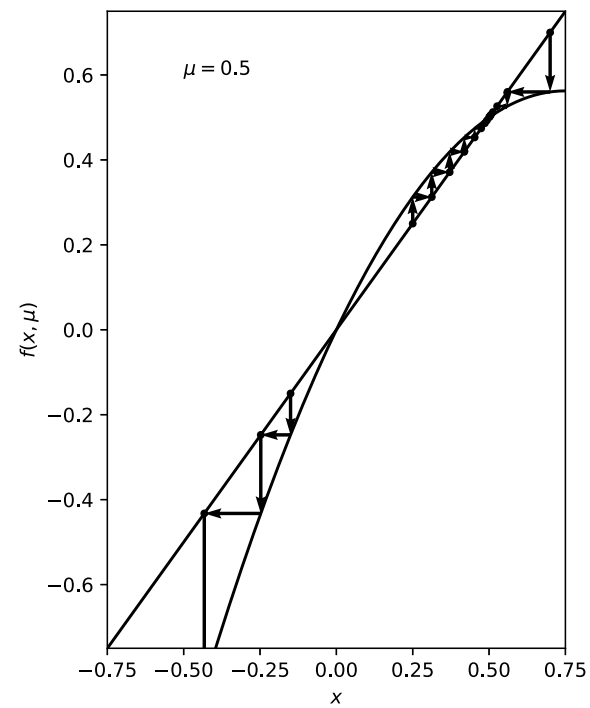
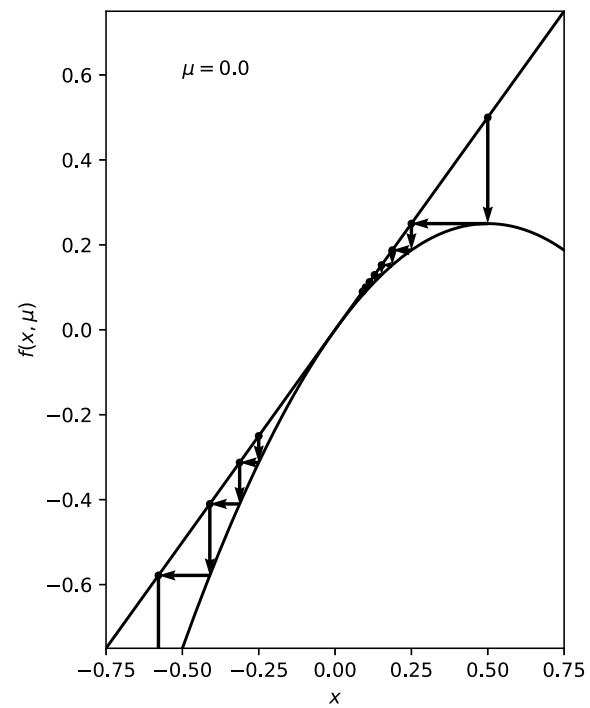
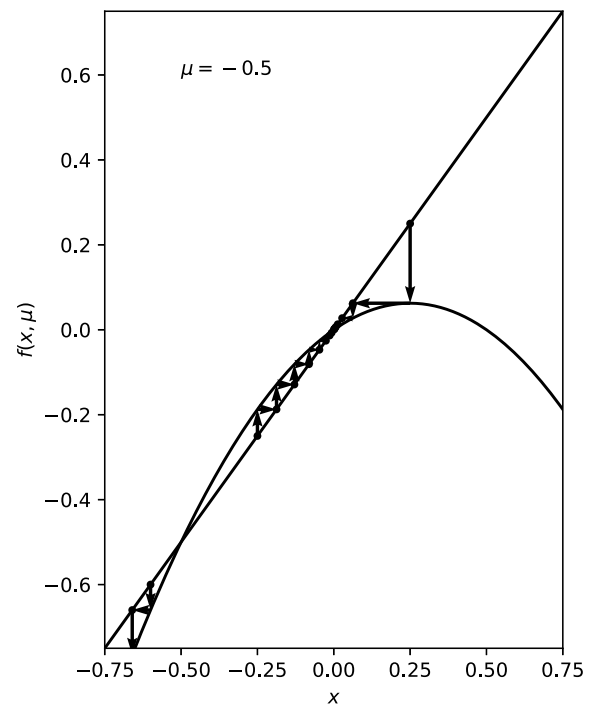
一般に1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) \quad (7.14)$$

が  $f(0, 0) = 0, f_x(0, 0) = 1$  を満たすとき,

$$f_\mu(0, 0) = 0, f_{x\mu} \neq 0, f_{xx}(0, 0) \neq 0 \quad (7.15)$$

ならば,  $\mu = 0$  のとき  $x = 0$  においてトランスクリティカル分岐が生じる.



## 1次元写像のピッチフォーク分岐

写像  $f(x, \mu)$  が  $x$  に関して奇関数

$$f(-x, \mu) = -f(x, \mu) \quad (7.17)$$

であるという拘束条件の下で一般的に生じる分岐.

$x$  に関して奇関数  $\Rightarrow$  原点が不動点

より, この拘束条件はトランスクリティカル分岐の拘束条件より強い.

## 1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) = x + \mu x - x^3 \quad (7.18)$$

を考える.

1.  $\mu < 0$ かつ $|\mu| \ll 1$ のとき: 不動点は $O = (0)$ のみ. 固有値 $1 + \mu < 1$ を持ち安定.
2.  $\mu = 0$ のとき: 不動点は $O = (0)$ のみで, 固有値は1.
3.  $\mu > 0$ かつ $|\mu| \ll 1$ のとき: 不動点 $O = (0)$ は固有値 $1 + \mu > 1$ を持ち不安定. 不動点 $O = (0)$ の両側に2つの不動点 $P^\pm = \pm\sqrt{\mu}$ が存在し, 固有値 $1 - 2\mu < 1$ を持ち安定.

⇝ パラメータの変化に伴い, 安定不動点 $O$ が不安定化し, その両側に安定な不動点 $P^\pm$ が発生する (ピッチフォーク分岐).

一般に1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) \quad (7.19)$$

が  $f(0, 0) = 0, f_x(0, 0) = 1$  を満たすとき,

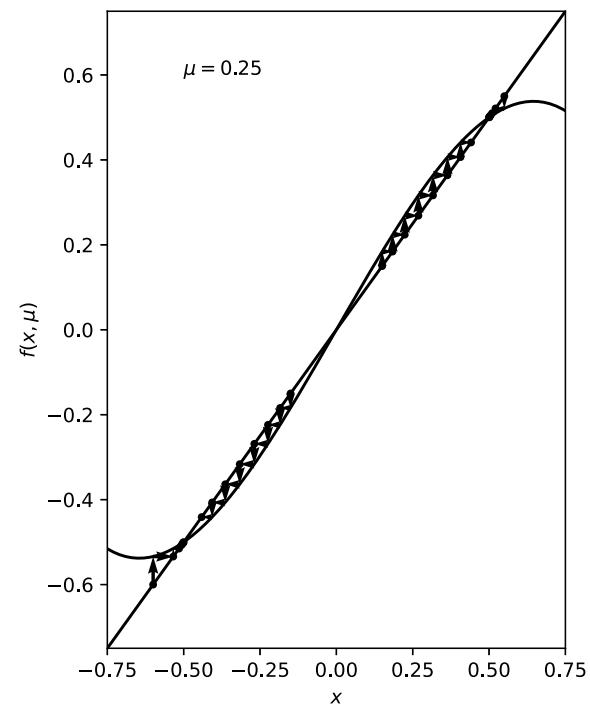
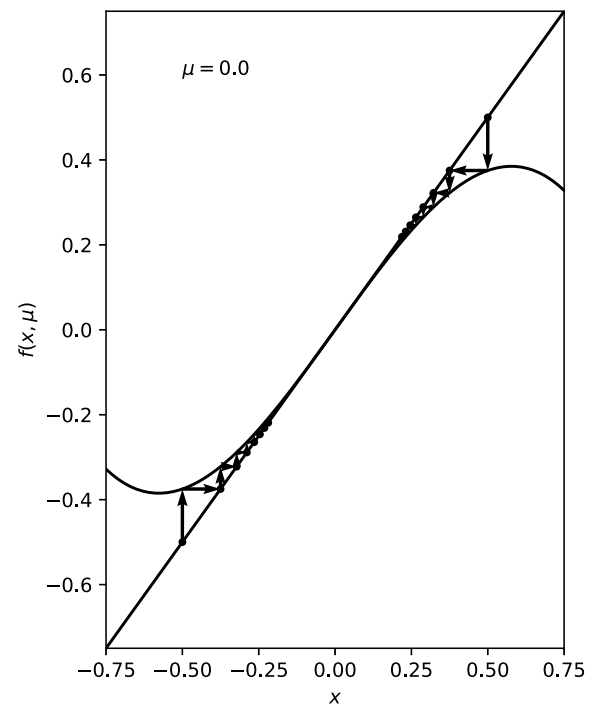
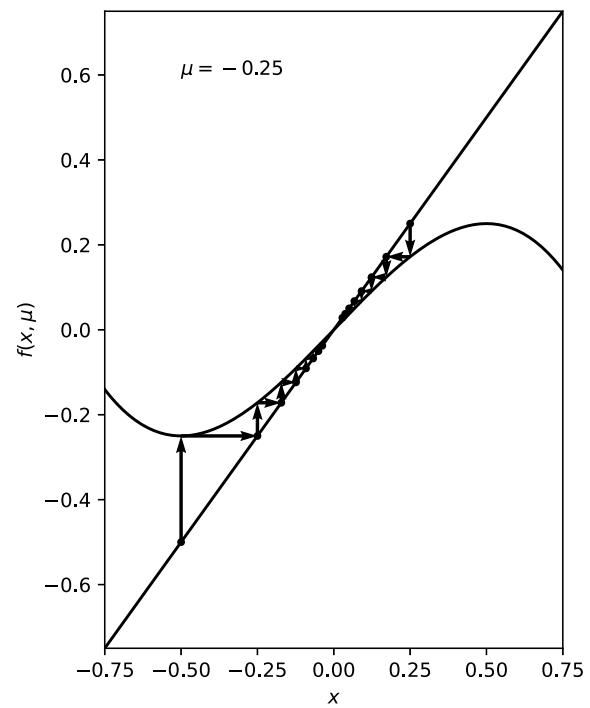
$$f_\mu(0, 0) = f_{xx}(0, 0) = 0, f_{x\mu}(0, 0) \neq 0, f_{xxx}(0, 0) \neq 0 \quad (7.20)$$

ならば,  $\mu = 0$  のとき  $x = 0$  においてピッチフォーク分岐が生じる.

ピッチフォーク分岐を生じる1次元写像の標準形は,

$$x \mapsto x + \mu x \mp x^3 \quad (7.21)$$

で与えられる.





# 1次元写像の周期倍分岐

## 1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) = -x - \mu x + x^3, \quad x \in \mathbb{R}, \mu \in \mathbb{R} \quad (7.22)$$

を考える.

1.  $\mu < 0$ かつ $|\mu| \ll 1$ のとき: 不動点 $O = (0)$ は固有値 $-1 - \mu$ をもつ.  $|-1 - \mu| < 1$ であるから, 不動点 $O = (0)$ は安定.
2.  $\mu = 0$ のとき: 不動点 $O = (0)$ は固有値 $-1$ を持つ.
3.  $\mu > 0$ かつ $|\mu| \ll 1$ のとき: 不動点 $O = (0)$ は固有値 $-1 - \mu < -1$ を持ち不安定. 不動点 $O = (0)$ の両側に2つの2周期点 $P^\pm = \pm\sqrt{\mu}$ が存在し, 安定である.

$\rightsquigarrow$  安定不動点 $O$ が不安定化し, その両側に安定な2周期点 $P^\pm$ が発生する (周期倍分岐).

$\mu > 0$ かつ $|\mu| \ll 1$ のとき,  $P^\pm = \pm\sqrt{\mu}$ が2周期点であることは,

$$f(\sqrt{\mu}, \mu) = -\sqrt{\mu} - \mu\sqrt{\mu} + \mu\sqrt{\mu} = -\sqrt{\mu} \quad (7.23)$$

$$f(-\sqrt{\mu}, \mu) = \sqrt{\mu} + \mu\sqrt{\mu} - \mu\sqrt{\mu} = \sqrt{\mu} \quad (7.24)$$

から分かる. また, これらが安定であることは,

$$f_x(x, \mu) = -1 - \mu + 3x^2 \quad (7.25)$$

を使い,

$$D_x(f^2)(\pm\sqrt{\mu}, \mu) = f_x(\mp\sqrt{\mu}, \mu)f_x(\pm\sqrt{\mu}, \mu) = (-1 + 2\sqrt{\mu})^2 < 1 \quad (7.26)$$

から分かる.

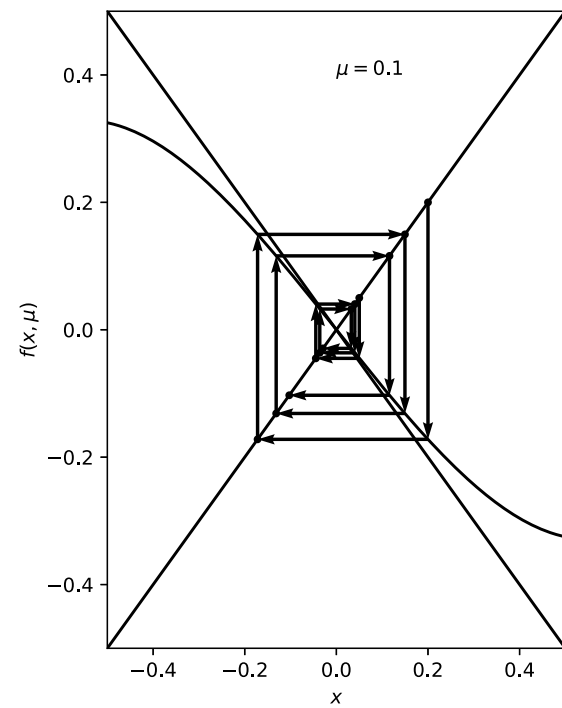
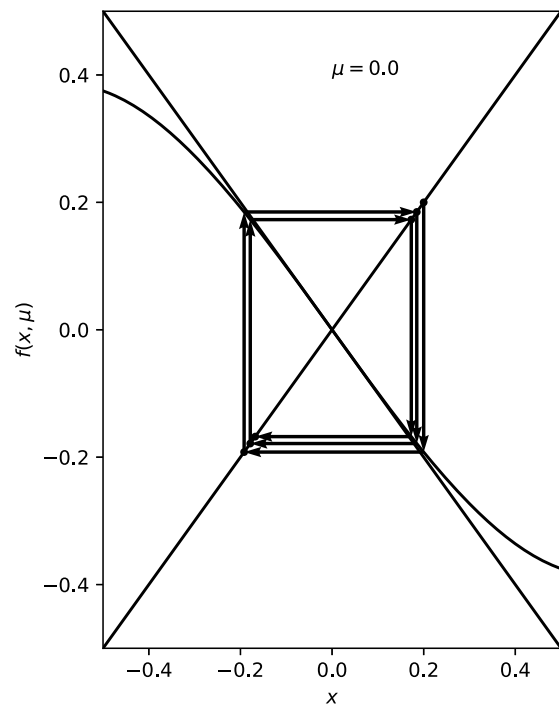
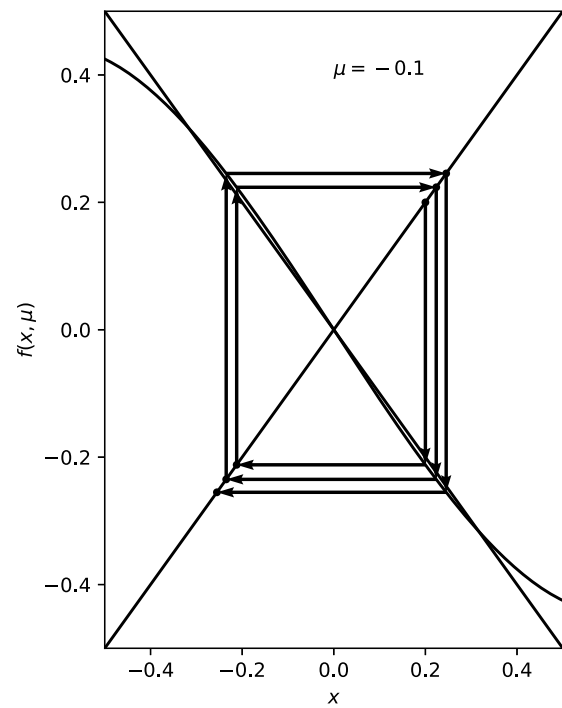
一般に1次元写像

$$x \mapsto f(x, \mu) \quad (7.27)$$

が  $f(0, 0) = 0$ ,  $f_x(0, 0) = -1$  を満たすとき,

$$\begin{aligned} (f^2)_\mu(0, 0) &= (f^2)_{xx}(0, 0) = 0, \\ (f^2)_{x\mu}(0, 0) &\neq 0, \quad (f^2)_{xxx}(0, 0) \neq 0 \end{aligned} \quad (7.28)$$

ならば,  $\mu = 0$  のとき  $x = 0$  において周期倍分岐が生じる.



2次元写像のサドル・ノード分岐，トランスクリティカル分岐，ピッチフォーク分岐，及び周期倍分岐

補足資料に掲載．

## 2次元写像のナイマルクーサッカー分岐

Jacobi行列

$$A = \begin{pmatrix} (f_1)_x & (f_1)_y \\ (f_2)_x & (f_2)_y \end{pmatrix} (\mathbf{0}, 0) \quad (7.31)$$

が絶対値1の複素共役固有値を持つ場合について述べる.

2次元写像

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} f_1(x, y, \mu) \\ f_2(x, y, \mu) \end{pmatrix} \quad (7.32)$$

に極座標変換

$$\begin{cases} x = r \cos \theta \\ y = r \sin \theta \end{cases} \quad (7.33)$$

を施したとき,

$$\begin{pmatrix} r \\ \theta \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} g(r) \\ h(r, \theta) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} r + d\mu r + ar^3 \\ \theta + c_0 + c_1\mu + br^2 \end{pmatrix} \quad (7.34)$$

で与えられる写像を考える ( $a, b, c_0, c_1, d$ : 定数).

$g(0) = 0$ より,  $\boldsymbol{x} = (0, 0)$ は不動点. 不動点 $\mathbf{0} = (0, 0)$ におけるJacobi行列

$$A(\mu) = \begin{pmatrix} (f_1)_x & (f_1)_y \\ (f_2)_x & (f_2)_y \end{pmatrix} (\mathbf{0}, \mu) \quad (7.35)$$

は,

$$A(\mu) = (1 + d\mu) \begin{pmatrix} \cos(c_0 + c_1\mu) & -\sin(c_0 + c_1\mu) \\ \sin(c_0 + c_1\mu) & \cos(c_0 + c_1\mu) \end{pmatrix} \quad (7.36)$$

で与えられる.

$A(\mu)$ の固有値は,

$$(1 + d\mu) \exp(\pm(c_0 + c_1\mu)i) = (1 + d\mu)(\cos(c_0 + c_1\mu) \pm i \sin(c_0 + c_1\mu)) \quad (7.37)$$

である.  $d > 0, a < 0$ のとき, 写像は次の特徴を持つ.

1.  $\mu < 0$ かつ  $|\mu| \ll 1$

- $\boldsymbol{x} = (0, 0)$ に絶対値  $1 + d\mu < 1$ の複素共役固有値  $(1 + d\mu) \exp(\pm(c_0 + c_1\mu)i)$ を持つ安定平衡点が存在する.

2.  $\mu = 0$

- $\boldsymbol{x} = (0, 0)$ に絶対値1の複素共役固有値  $\exp(\pm c_0 i)$ を持つ平衡点が存在する. 線形化行列は,

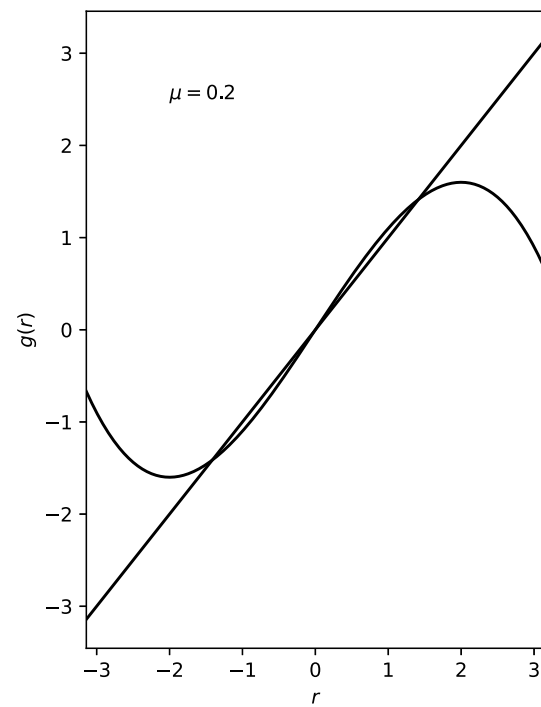
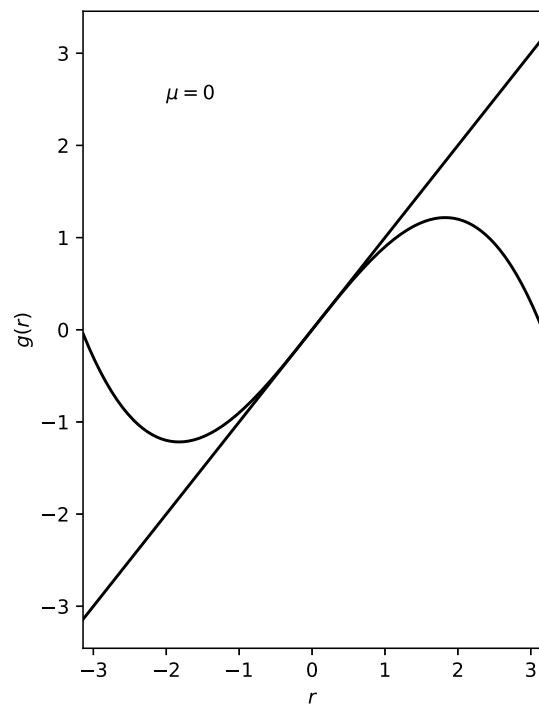
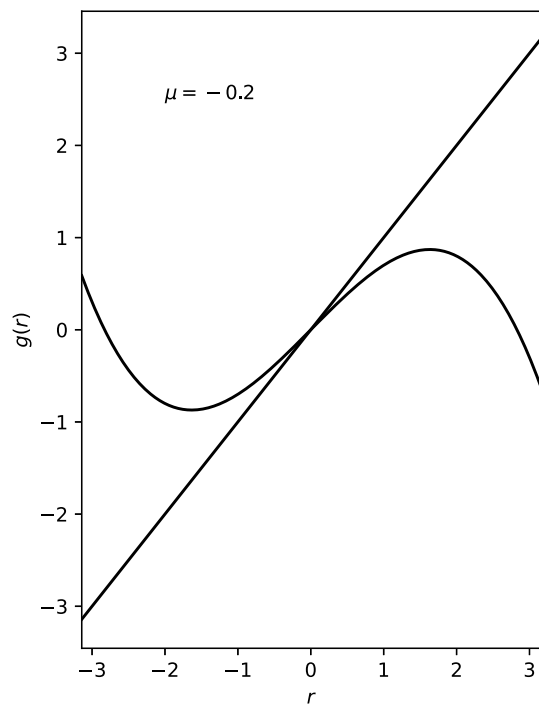
$$\begin{pmatrix} \cos(c_0) & -\sin(c_0) \\ \sin(c_0) & \cos(c_0) \end{pmatrix}$$

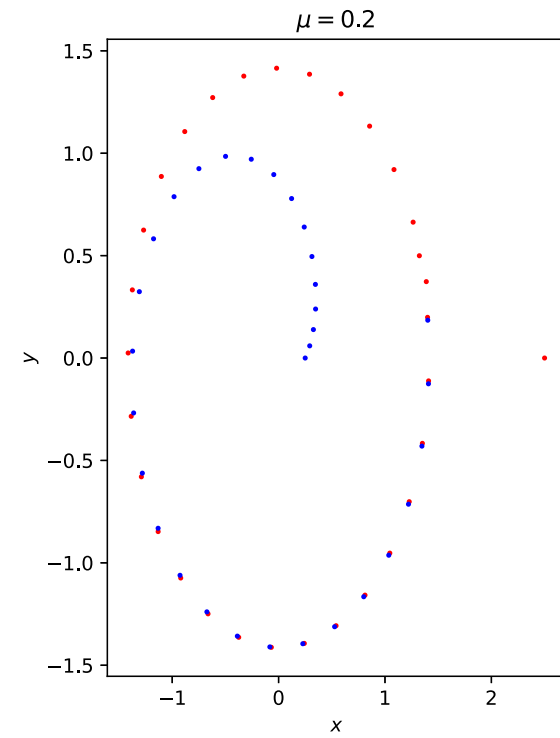
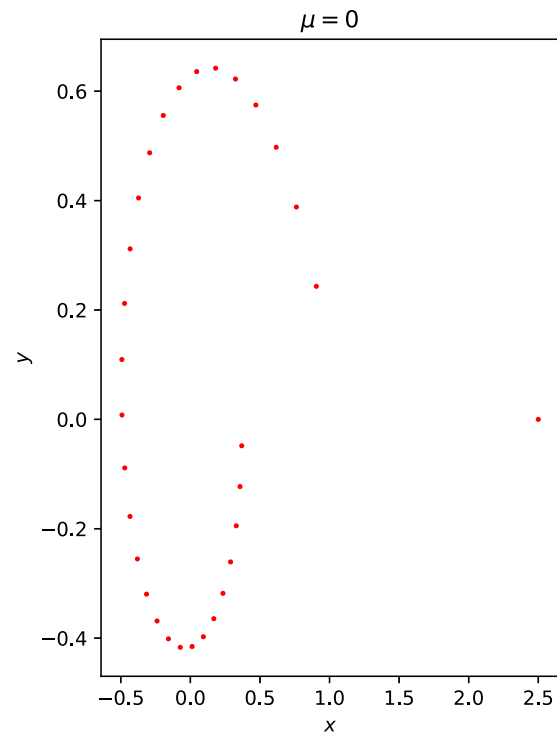
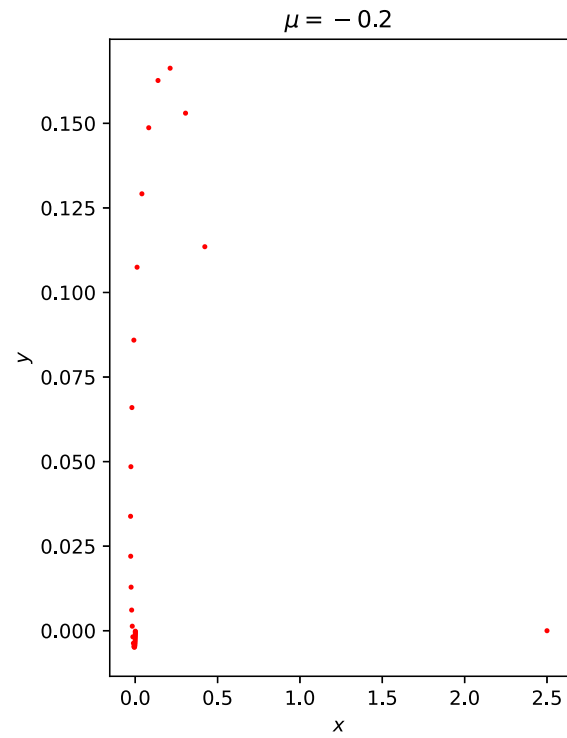


### 3. $\mu > 0$ かつ $|\mu| \ll 1$

- $\mathbf{x} = (0, 0)$ に絶対値 $1 + d\mu > 1$ の複素共役固有値 $(1 + d\mu) \exp(\pm(c_0 + c_1\mu)i)$ を持つ不安定平衡点が存在する．その周囲に，半径 $r = \sqrt{-d\mu/a}$ の不変円を持つ．不変円は，周囲の点を近づけるという意味で安定である．

一般に，複素共役固有値を持つ安定不動点があるパラメータの変化に伴って不安定化し，その周囲に安定な不変円が発生する分岐をナイマルクーサッカース分岐 (Naimark-Sacker) という．また，時間を反転した力学系も考慮に入れて，複素共役固有値を持つ不安定不動点があるパラメータの変化に伴って不安定化し，その周囲に不安定な不変円が発生する分岐も同じ名前と呼ばれる．





## ベクトル場の周期軌道の分岐

3次元ベクトル場に周期軌道 $\Gamma$ が存在するとする． $\Gamma$ と1点 $p$ で横断的に交わる2次元平面をとることにより，ポアンカレ写像が定義できる．

⇔ 3次元自律ベクトル場の周期軌道の分岐は，ポアンカレ写像の不動点 $p$ の分岐に帰着される．

### Def 7.3

ポアンカレ写像の不動点 $p$ がサドルノード分岐，トランスクリティカル分岐，ピッチフォーク分岐，周期倍分岐，およびナイマルクーサッカー分岐を起こすとき，周期軌道 $\Gamma$ は，それぞれ，サドルノード分岐，トランスクリティカル分岐，ピッチフォーク分岐，周期倍分岐，およびナイマルクーサッカー分岐を起こしたという．

次に、時間に関して周期 $T$ の周期性を持つ2次元非自律系ベクトル場

$$\frac{d\mathbf{x}}{dt} = g(t, \mathbf{x}), \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \quad (7.39)$$

$$g(t, \mathbf{x}) = g(t + T, \mathbf{x}) \quad (7.40)$$

の周期軌道の分岐を考える．

このベクトル場の流れを $\varphi : \mathbb{R} \times \mathbb{R} \times \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2$ とするとき、 $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ に対して、 $\varphi(T, 0, \mathbf{x}) \in \mathbb{R}^2$ を対応する写像

$$P : \mathbb{R}^2 \ni \mathbf{x} \mapsto \varphi(T, 0, \mathbf{x}) \in \mathbb{R}^2 \quad (7.41)$$

を定義する．これを非自律系のポアンカレ写像，またはストロボ写像という．

2次元非自律ベクトル場の周期軌道の分岐は，このポアンカレ写像の不動点および周期点の分岐に帰着される．